

日韓語の動詞結合形成モデルの活用

— 「～食べる」と「～먹다」の例を通して—

李 忠 奎*

(e-mail : ch4229@hanmail.net)

目 次

1. はじめに
 2. 「食べる」をV2とする動詞結合
 3. 「먹다」をV2とする動詞結合
 4. 「～食べる／～먹다」の動詞結合形成モデル
 5. まとめ
-

1. はじめに

本稿は、李(2010b)で構築した「日韓語の動詞結合形成モデル」が個別例の分析にも活用可能であることを示そうとするものである¹⁾。具体的には、日本語の「食べる」とそれに対応する韓国語の「먹다」を後項動詞(V2)とする動詞結合について分析し、そこで得た結果を上記のモデルに反映して確認することによって、李(2010b)のモデルが個別例の分析結果を把握する際にも役に立つことを主張する。その過程において、本稿で確認する主なポイントは、以下の二点である。

- (1)a. 「食べる」と「먹다」をV2とするそれぞれの動詞結合に見られる特徴とは何か。
- b. 当該の動詞をV2とする動詞結合の間に見られる共通点と相違点とは何か。

* 韓南大学校、講師、対照言語学

1) 本稿は、2009年に北海道大学に提出した博士学位論文の一部と李(2010b)を元にして書いたものである。

李(2010b)のモデルが両言語の動詞結合の全体像を把握するために構築したものであれば、本稿のモデルは、その活用の一例として、個別例の特徴を把握するためのものである。なお、李(2009b)においても「食べる」と「먹다」をV2とする動詞結合について考察したが、本稿は李(2009b)を参照しつつ、そこで述べていない内容も追加する形で論を進めることにする。

2. 「食べる」をV2とする動詞結合

本節では「食べる」をV2とする動詞結合について考察する。当該の動詞結合は、まず、「介在要素の有無」という形態論的基準によって、「介在要素有りタイプ」と「介在要素無しタイプ」とに二分することができる。以下、各タイプについて、具体例を見ながら個別に見ていく。

2.1. 「～食べる」の介在要素有りタイプ

「食べる」をV2とする介在要素有りタイプは、以下のようなものを典型的な例として挙げることができる。

- (2)a. 今日は久しぶりにカレーを作って食べた。
 b. 安くておいしいため、韓国人は豚肉を好んで食べる。

(2)の「作って食べる」と「好んで食べる」は、介在要素 {ーで} を挟んで「作る」と「好む」が「食べる」とそれぞれ結合したものである。この際、後者の場合は、動詞結合を形成する過程で、いわゆる「撥音便」を起こし、結果的に介在要素が {ーで} という形で具現される²⁾。

さて、両者の例は、①形態・②統語・③意味の3つのレベルにおいて共通点を持つ。まず、形態レベルでは介在要素が存在するという点が共通する。次に、統語レベルにおいてはV1とV2が共に格支配能力を有することと、境界部にV2だけを修飾できる語句が挿入可能であることが共通する。

- (3)a. (私が)カレーを作った／食べた。
 b. 今日は久しぶりにカレーを作って、おいしく食べた。

2) ちなみに、撥音便による {ーで} の具現は、「嗅ぐ、死ぬ、飛ぶ、読む」のように「ぐ、ぬ、ぶ、む」で終わるもの、より正確には「g, n, b, m」の子音で終わるものが前項動詞(V1)に立つ場合に限定される(益岡・田窪(1992: 15~16)、李(2009c: 91~92))。

- (4)a. 韓国人が豚肉を好む／食べる。
 b. 安くておいしいため、韓国人は豚肉を好んで、よく食べる。

最後に、意味レベルにおいては、V2が「食物を口に入れ、嚙んで飲み込む」(『大辞林』)という動詞本来の意味を保持する。

以上、3つのレベルにおける共通点は、李(2010b: 87)で設定した「句」「補助動詞結合」「複合動詞」を判別する基準のうち、「句」の基準を全てクリアするものである。従って、上記の二つの例は「句」と認めることができる。

李(2009b)ではなされていない分類だが、上記の例は、さらに「一つの動作であるか」という基準によって区別することができる。一つの動作であるかどうかは「V1してからV2」との置き換え可否によって判断するが、前者は「カレーを作ってから食べる」のように置き換えることができるので二つの動作となり、後者は「豚肉を好んでから食べる」のように置換できないので、一つの動作に該当する。以下の例も同じ分析の可能な例として挙げられる。(5a)が「作って食べる」と同様に「V1してからV2」との置き換えが可能なものであり、(5b)が「好んで食べる」と同様にその置き換えが難しいものである。

- (5)a. 買って食べる、選んで食べる、すくって食べる、煮込んで食べる、焼いて食べる、取り出して食べる、齧って食べる、盛って食べる、切って食べる、運んで食べる、漬けて食べる、乾かして食べる、分けて食べる、温めて食べる、炒めて食べる、茹でて食べる、座って食べる、拾って食べる、蒸して食べる、揚げて食べる、舐めて食べる、割って食べる、混ぜて食べる、立って食べる、盗んで食べる…
 b. 惜しんで食べる

ちなみに、(5a)には、V1に「座る、立つ、…」のような「食べる」の「様態」として解釈される動詞もあるが、「焼く、齧る、茹でる、…」のような「食べる」の「手段」として解釈される動詞が多いことが分かる。李(2009b: 20)も指摘したように「どうやって食べるか」という「食べる」の「手段」の解釈が可能な動詞は全てV1に立つことができると考えられる。一方、(5b)には「惜しんで食べる」だけが挙げられているが、「好んで食べる」と同じ分析の可能なものは、今のところ、この例しか見つけていない。数としては前者の方が圧倒的に多いと言える。

2.2. 「～食べる」の介在要素無しタイプ

「食べる」をV2とする介在要素無しタイプは、不思議なくらい殆どない。今のところ、筆者の確認した範囲では「むさぼり食べる」が唯一の例として挙げられる³⁾。これは、李(2009b: 22)も検討したが、(6c)のような操作の結果が決定的な根拠になって「複合動

詞」と分類される。

- (6)a. 次郎はラーメンをむさぼり食べた。
 b. *次郎はラーメンをむさぼり{は/も}食べた。 (← 副助詞不可)
 c. *次郎はラーメンをむさぼり、おいしく食べた。 (← V2だけの修飾語句不可)

以上、「食べる」をV2とする動詞結合について簡単に見た。今までの考察結果を一言で整理すると、「「食べる」をV2とする動詞結合は、殆ど介在要素有りタイプの形で具現される」のようにまとめることができる。

3. 「먹다」をV2とする動詞結合

本節では「먹다」をV2とする動詞結合について考察する。当該の動詞結合も日本語の場合と同じように「介在要素の有無」という形態論的基準によって、介在要素有りタイプと介在要素無しタイプとに二分することができる。

3.1. 「～먹다」の介在要素有りタイプ

「먹다」をV2とする介在要素有りタイプは、以下のようなものを典型的な例として挙げることができる。

- (7)a. 오늘은 정말 오랜만에 만두를 만들어 먹었다.
 b. 그는 사과를 보자기로 가리고 먹었다. (김기혁(1995 : 345))
 c. 냉장고에 굴 있어. 굴 가져다 먹어.

(7)の「만들어 먹다」「가리고 먹다」「가져다 먹다」は、V1動詞がそれぞれ介在要素 {－어} {－고} {－어다} を挟んでV2動詞と結合したものである。これらは、①介在要素が存在する、②V1とV2の両方に格支配能力がある、③境界部に {－서} か {－가} の挿入ができる、④V2だけを修飾する語句の挿入が可能である、⑤V2の本来の意味を保つという共通点を持っており、このような特徴を総合すると、「句」と分類するのが妥当であると判断される。参考までに、③と④の操作を以下に示す。

3) 「食べる」は、本来は「与える」「くれる」の意の尊敬語「賜(た)ぶ」に対する謙讓語で「いただく」の意であり、かつての日本語では「食べる」を「食う」と言っていたこと(李(2009b : 23))、また、『日本国語大辞典』(第二版)に見出し語として「むさぼり食う」が収録されていて、「むさぼり食べる」は収録されていないことを総合すると、「むさぼり食べる」は「むさぼり食う」の類推で作られたものと考えられる。

- (8)a. 오늘은 정말 오랜만에 만두를 만들어{서/배부르게} 먹었다.
 b. 그는 사과를 보자기로 가리고{서/혼자 몰래} 먹었다.
 c. 냉장고에 굴 있어. 굴 가져다{가/공부 하면서} 먹어.

「먹다」をV2とする介在要素有りタイプの中には、上の例と区別することができる以下のようなものもある。

- (9)a. 그 건달은 새로 산 살림살이를 부수어 고물로 팔아먹었다. (『標準』)
 b. 사람들이 허균을 놀려먹었다. (web)

(9)の「팔아먹다」「놀려먹다」は、先の「만들어 먹다」などの例と比べると、統語レベルと意味レベルにおいて明確な違いがある。つまり、統語レベルではV2が格支配能力を失っていることと、境界部に {－서} の挿入やV2だけを修飾する語句の挿入が不可能であることが異なる。

- (10)a. 그 건달이 살림살이를 고물로 팔았다/*먹었다.
 b. *그 건달이 살림살이를 부수어 고물로 팔아_서 먹었다.
 c. *그 건달이 살림살이를 부수어 고물로 팔아 몰래 먹었다.
 (11)a. 사람들이 허균을 놀렸다/*먹었다.
 b. *사람들이 허균을 놀려_서 먹었다.
 c. *사람들이 허균을 놀려 만_군 먹었다.

また、意味レベルではV2が本来の意味を失っているという点が異なる。このような特徴を考慮すると、これらは「句」より「複合動詞」と分類するのが妥当であると考えられる。以下のようなものが同じ分析の可能な例として挙げられる。

- (12) 가르쳐먹다, 고장내먹다, 고쳐먹다, 골려먹다, 굴러먹다, 꺼먹다, 날려먹다, 놀아먹다, 농아먹다, 농쳐먹다, 다잡아먹다, 돌려먹다, 꽤먹다, 들어먹다, 등쳐먹다, 때려먹다, 배워먹다, 부러먹다, 부쳐먹다, 생겨먹다, 속여먹다, 써먹다, 알아먹다, 잊어먹다, 질러먹다, 털어먹다, 틀려먹다

なお、(9)と(12)の例は {－어} が介在するものであるが、①「먹다」をV2とする、② {－고} か {－어다} が介在する、③「句」と区別できる「複合動詞」と判断されるという三つの条件を全て満たすものはないようである。今のところ、まだ見つけていない。

先の「만들어 먹다」などの例と「팔아먹다」などの例は、前者が「句」としての用

法しがなく、後者は「複合動詞」としての用法しかないと考えられるものであった。しかし、例の中には、同一の形態が「句」と「複合動詞」の両方の用法を併せ持つものもある。

- (13)a. 친목모임서 소 잡아먹은 노인 2명 잇따라 숨져. (web)
 b. 일본어 번역이 생각보다 시간을 많이 잡아먹었다.

(13a)の「잡아 먹다⁴⁾」と(13b)の「잡아먹다」は、全く同じ構成要素で作られたものであるが、先の幾つかの統語的操作を行うと、明確な相違点を指摘することができる。

- (14)a. 노인 2명이 소를 잡았다/먹었다.
 b. 친목모임서 소를 잡아선 먹은 노인 2명이 잇따라 숨졌다.
 c. 친목 회원인 이들은 오늘 아침부터 이곳 경로당에 모여 소 한 마리를 잡아 술과 함께 나눠 먹었습니다. (web)
 (15)a. *일본어 번역이 시간을 잡았다/*먹었다.
 b. *일본어 번역이 생각보다 시간을 잡아{선/맡인} 먹었다.

意味レベルから見ても前者はV2の本来の意味を保持しているのに対して、後者はV2の本来の意味を失っている。以上のことを総合すると、(13a)の「잡아 먹다」は「句」であり、(13b)の「잡아먹다」は「複合動詞」であると分析することができる。結果的に、同一の形態構造を持つ動詞結合が文脈次第で「句」とも「複合動詞」ともなり得るということであるが、これらは「意味変化」によって「句」から「複合動詞」への転換が行ったものと説明することができる⁵⁾。「食べる」をV2とする動詞結合の中にはこの類の例が見られないが、「먹다」をV2とする動詞結合の中には同じ分析の可能な例がかなり存在する。「굴을 까 먹다/전채산을 까먹다」「과자를 받아 먹다/뇌물을 받아먹다」「피자를 시켜 먹다/후배를 시켜먹다」「뽕감을 우려 먹다/군대 이야기를 우려먹다」(李(2009b: 25))などが代表的な例として挙げられる。ちなみに、(13)のような動詞結合は、その殆どが {－어} が介在したものであり、{－고} が介在したものは、今のところ、以下のようなものしか見つけておらず、{－어다} が介在したものは見当たらない。なお、(16)は李(2009b: 26)から引用したものである。

- (16)a. 간식은 조금만 더 놓고 먹자. (←「句」)
 b. 최근 놓고먹는 사람들이 늘었다. (←「複合動詞」)

4) (13a)から分かるように、原文では分かち書きがなされていないが、当該の例は、(13b)の例と区別できる「句」と判断されるものなので、本稿では意図的に分かち書きをした。

5) 窪菌(1995: 52)の「語源的に見ると、複合語の多くは対応する句構造から派生するものであり、後者が慣用化され2語が1語に融合されていく過程において前者が作り出されるものと考えられる」という指摘も参照されたい。

3.2. 「～먹다」の介在要素無しタイプ

「먹다」をV2とする介在要素無しタイプは現代韓国語には見当たらない。韓国語の語幹複合語について分析した이선영(2006: 197~202)に「덕먹다」「썰먹다」「빌먹다」などの例が挙げられているが、これらはそれぞれ「찍어 먹다、쪼아 먹다」「빨아 먹다」「빌어먹다」の古語であり(『標準』)、現代韓国語としては用いられない。また「(약속을)까먹다」「(수업을)빠먹다」などの例は、外観上、介在要素無しタイプのように見えるが、これらも以下のような「母音脱落」(太字)の過程を経て作られた介在要素有りタイプと考えられるので(김계곤(1996: 481)、이관규(2002: 105))、介在要素無しタイプからは除外される。

- (17)a. 까다 + {-아} → **까**아(kka-a) + 먹다 → **까**먹다
 b. 빠다 + {-어} → **빠**어(ppae-**eo**) + 먹다 → **빠**먹다

ちなみに、(17a)のように、語幹母音と介在要素母音が同じなので、結果的に同一母音が重なった場合、前の母音が脱落するか(이관규(2002: 105))、後ろの母音が脱落するか(김계곤(1996: 481)、이호영(1996: 184))については意見の分かれるところであるが、本稿では、動詞結合の形成に関与した介在要素はなるべくそのままの形で保持した方が望ましいという判断から、이관규(2002: 105)に従い、前の母音が脱落すると分析した⁶⁾。

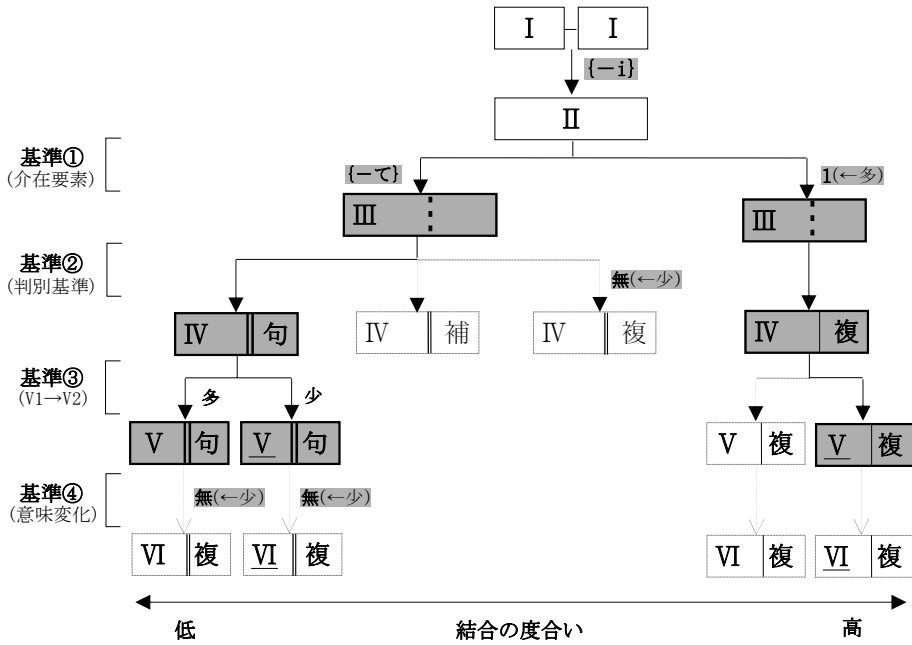
以上、「먹다」をV2とする動詞結合について簡単に見た。本節の考察結果を一言で整理すると、「「먹다」をV2とする動詞結合は、全て介在要素有りタイプの形で具現される」のようにまとめることができる。

4. 「～食べる／～먹다」の動詞結合形成モデル

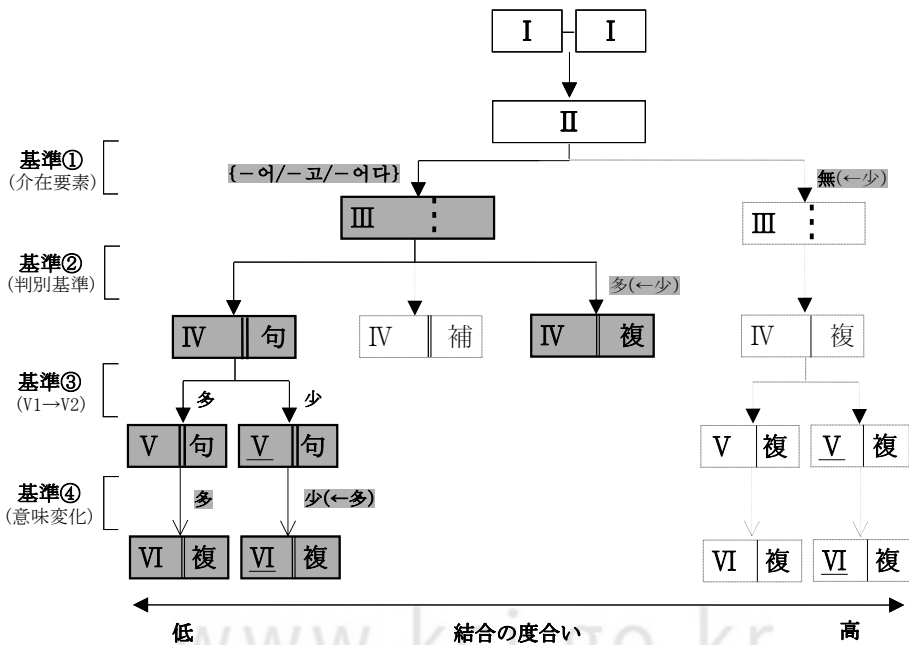
本節では、今までの考察結果を李(2010b)の「日韓語の動詞結合形成モデル」に反映し、実際、同モデルを運用することによって、李(2010b)のモデルが個別例の分析結果を把握する際にも有効に機能することを確認する。

6) 同一母音が重なった場合、前の母音が脱落すると分析すると、例えば、補助動詞結合である「**파** 보다(掘ってみる)」における「파」を「**파**다」の語幹そのものと解釈する可能性を却下するという利点もある。この場合「파 보다」と「掘ってみる」は、①V1に立つ動詞語幹が音韻現象によって形を変える(파→ㅍ, hor→hot)、②介在要素が明示される({-아} と {-て})、③V2が本来の意味から後退するという共通点を持つ。

4.1. 「食べる」をV2とする動詞結合形成モデル



4.2. 「먹다」をV2とする動詞結合形成モデル



4.3. 「～食べる／～먹다」の動詞結合形成モデルの見方と具体例

ここでは、具体例を挙げながら、上記のモデルの見方について説明する。本稿のモデルは李(2010b)のモデルを元にしていて、見方の説明は基本的に李(2010b)のそれを簡略にまとめた形になる。ただし、李(2010b)の説明に問題があるところは、本稿において修正を加えることにする。

4.3.1. 第Ⅰ段階

第Ⅰ段階は、動詞結合を形成する最初の段階として、素材入力段階である。V1とV2になる動詞が基本形の形でそれぞれ独立して存在する。各aが介在要素有りタイプ of 具体例であり、各bが介在要素無しタイプの具体例である(以下、同様)。

- (18)a. 作る—食べる / 捕る—食べる / 好む—食べる
 b. むさぼる—食べる
 (19)a. 만들다—먹다 / 잡다—먹다 / 즐기다—먹다 / 팔다—먹다
 b. 該当する例無し (cf. 무르다—익다)

「먹다」をV2とする介在要素無しタイプは存在しないと考えられるので、(19b)は「該当する例無し」とした。その代わりに、参考までに「무르익다」の形成過程と分類を示す。

4.3.2. 第Ⅱ段階

第Ⅱ段階は、どの動詞がV1になり、どの動詞がV2になるかということが決定された段階である。V1は日韓語共に語幹の形式を取るが、日本語では、V1に所謂「子音語幹動詞」が現れる場合、母音「i」を付加するという音韻処理がなされる。

- (20)a. V1(tukur)—i—V2(食べる) / V1(tor)—i—V2(食べる) /
V1(konom)—i—V2(食べる)
 b. V1(musabor)—i—V2(食べる)
 (21)a. V1(만들)—V2(먹다) / V1(잡)—V2(먹다) / V1(즐기)—V2(먹다) /
V1(팔)—V2(먹다)
 b. 該当する例無し (cf. V1(무르)—V2(익다))

ここまでは、動詞結合を形成するための準備段階として考える。

4.3.3. 第Ⅲ段階

第Ⅲ段階は、第Ⅱ段階の各要素がそれぞれ結合する形態的完成段階である。この

際、「介在要素の有無」という基準①によって、介在要素有りタイプ(モデルの左側)と介在要素無しタイプ(モデルの右側)とに二分される。動詞結合を形成する際に生じる音韻現象はこの段階で確認することができる。

- (22)a. Ⅲの^作って#^食べる / Ⅲの^捕って#^食べる / Ⅲの^好んで#^食べる
 b. Ⅲの^むさばり#^食べる
 (23)a. Ⅲの^만들어#^먹다 / Ⅲの^잡아#^먹다 / Ⅲの^즐거#^먹다 / Ⅲの^팔아#^먹다
 b. 該当する例無し (cf. Ⅲの^무르#^익다)

なお、この段階では動詞結合が形態的には完成してあるが、それが「句」なのか「補助動詞結合」なのか、それとも「複合動詞」なのかといった下位分類までは確定されていない。そのため、境界線は臨時的なものとなり、(22)と(23)では便宜上「#」で表記した。

4.3.4. 第Ⅳ段階

第Ⅳ段階は、第Ⅲ段階の動詞結合に、以下の表にまとめた基準②を厳密に適用し、総合的な判断によって下位分類を行った段階である。ちなみに、本稿では李(2010b: 87)の判別基準に、統語レベルにおける「副助詞の挿入可否」という基準も追加した。なお、統語レベルの最後の基準は、韓国語のみに適用するものである。

		句	補助動詞結合	複合動詞
形態レベル	介在要素の存在	義務	義務	任意
統語レベル	格支配による分類	I類(VV型)	(原則)Ⅱ類(Vv型)	四パターン全て
	副助詞の挿入可否	可	可	介在要素有り：可 介在要素無し：不可
	副詞などの挿入可否	可	不可	不可
	{-서/-가}の挿入可否	可	不可	不可
意味レベル	V2の本来の意味	保つ	後退する	語によって異なる

結果的に、介在要素有りタイプは大きく「句」「補助動詞結合」「複合動詞」と下位分類することができ、介在要素無しタイプは「複合動詞」とライセンスされる。

- (24)a. Ⅳの^作って^食べる(句) / Ⅳの^捕って^食べる(句) / Ⅳの^好んで^食べる(句)
 b. Ⅳの^むさばり^食べる(複)
 (25)a. Ⅳの^만들어 ^먹다(句) / Ⅳの^잡아 ^먹다(句) / Ⅳの^즐거 ^먹다(句) /
 Ⅳの^팔아^먹다(複)
 b. 該当する例無し (cf. Ⅳの^무르^익다(複))

4.3.5. 第V・V段階

第V・V段階は、第IV段階の動詞結合を「一つの動作であるか」という基準③によって二種類に大別した段階である。モデルの方では「V1→V2」となっている。一つの動作であるかどうかは「V1してからV2」との置き換え可否によって判断し、両タイプ共に左側の方に二つの動作であるものを(第V段階)、右側の方に一つの動作であるものを位置させる(第V段階)。

- (26)a. IVの作って食べる(句) → Vの作って食べる(句) /
 IVの捕って食べる(句) → Vの捕って食べる(句) /
 IVの好んで食べる(句) → Vの好んで食べる(句)
 b. IVのむさぼり食べる(複) → Vのむさぼり食べる(複)
- (27)a. IVの만들어 먹다(句) → Vの만들어 먹다(句) /
 IVの잡아 먹다(句) → Vの잡아 먹다(句) /
 IVの즐거 먹다(句) → Vの즐거 먹다(句) /
 b. 該当する例無し (cf. IVの무르익다(複) → Vの무르익다(複))

なお、介在要素有りタイプにおいて「複合動詞」の第IV段階は基準③による分類がなされていないが、その理由は日本語にはそこに分類される例がそもそもないし、韓国語にはその例、具体的には、先の(12)の例の中に二つの動作と見るべきものが見当たらないからである。

4.3.6. 第VI・VI段階

第VI・VI段階は、第V・V段階の動詞結合に「意味変化が見られるか」という基準④を更に適用した段階である。当然、意味変化の見られる例だけが適用され、意味変化の見られない例は該当しない。この際、左側の介在要素有りタイプの場合は、意味変化によって「句」から「複合動詞」への転換が行われる。

- (28)a. Vの作って食べる(句) → × / Vの捕って食べる(句) → × /
 Vの好んで食べる(句) → ×
 b. Vのむさぼり食べる(複) → ×
- (29)a. Vの만들어 먹다(句) → × / Vの즐거 먹다(句) → × /
 Vの취를잡아 먹다(句) → VIの(시간을)잡아먹다(複)
 b. 該当する例無し (cf. Vの(감이)무르익다(複) → VIの(사랑이)무르익다(複))

結果として、第V・V段階に属するものの一部だけが第VI・VI段階にまで進むことになるが、このことをモデルの方では矢印を区別することによって表した。

4.3.7. その他

ここでは、まだ言及していない枠内の「境界線」について説明する。境界線の種類と位置、また、それらの意味を簡単に表にまとめると、以下のようになる。

	種類	介在要素	位置	意味
①	点線	有り・無し	第Ⅲ段階	臨時的なもの
②	太い二重実線	有り	句の第Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ段階	副詞などの挿入可
③	細い二重実線	有り	補助動詞結合の第Ⅳ段階 複合動詞の第Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ段階	副助詞などの挿入可
④	細い実線	無し	複合動詞の第Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ・Ⅶ段階	如何なる要素も挿入不可

主な境界線の意味を具体例を挙げながら確認すると、以下のようになる。

まず、「句」の第Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ段階にある「太い二重実線」は、「境界部に比較的自由に副詞のようなものを挿入することができる」ということを意味する。

- (30)a. 今日は久しぶりにカレーを作って、おいしく食べた。(=3b)
 b. 이들은 소 한 마리를 잡아 술과 함께 나눠 먹었습니다.(=14cより)
 c. 조 회장의 봉사활동은 궁핍했던 어린 시절에 닿아 있다. “다섯 살 때 영양 실조로 죽기 직전까지 갔어요. 쥐를 잡아 구워 먹으며 버텼지. 그때 한 살 어린 동생은 결국 죽었어요.” (web)

次に、「補助動詞結合」の第Ⅳ段階と介在要素有りタイプの「複合動詞」の第Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ段階にある「細い二重実線」は「境界部に {－は} とか {－는} {－도} などの一部の要素を挿入することが可能な場合がある」ということを意味する。なお「食べる」をV2とする「補助動詞結合」の例はないため、(31a)は「食べてみる」を用いている。

- (31)a. いろいろ少しずつ食べてはみたけど、全部私の口には合わなかった。
 b. 일본어 번역이 생각보다 시간을 많이 잡아는 먹었지만, 좋은 공부가 되었다.

最後に、介在要素無しタイプの「複合動詞」の第Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ・Ⅶ段階にある「細い実線」は「境界部に如何なる要素の挿入も許容しない」ということを意味する。なお「먹다」をV2とする介在要素無しタイプはないため、(32b)は「무르익다」を用いている。

- (32)a. *次郎はラーメンをむさぼり{は/も/おいしく}食べた。(=6b, cより)
 b. *분위기가 무르{는/도/한창}익었다.

以上、4.3.では具体例を挙げながら「～食べる／～먹다」の動詞結合形成モデルの

見方について簡略に説明した。以下では冒頭の(1)に焦点を当てて考察結果を整理する。

4.4. 「～食べる／～먹다」の動詞結合に見られる主な特徴

「食べる」と「먹다」をV2とする動詞結合に見られる主な特徴は、以下のようなものを挙げることができる。

- (33)a. 日韓語ともに介在要素無しタイプとしては具現されない。
- b. 日韓語ともに「補助動詞結合」と分類される例が存在しない。
- c. 日本語には介在要素有りタイプの「複合動詞」が見当たらないが、韓国語には介在要素有りタイプの「複合動詞」がかなり見られる。

(33a, b)は日韓語の間に見られる共通点であり、(33c)は相違点である。以下、各特徴についてももう少し詳しく説明する。

4.4.1. 稀な介在要素無しタイプ

まず、最初の特徴として「～食べる／～먹다」の動詞結合がほぼ全部介在要素有りタイプであって、介在要素無しタイプの例は殆どないということが挙げられる。今まで確認した範囲では、介在要素無しタイプの例は、日本語と韓国語を合わせて「むさぼり食べる」が唯一の例であり、これも本来から存在していたものではなく「むさぼり食う」から類推で作られたものと考えられる。

日韓語の動詞結合の全体を見渡した時、韓国語には「오가다, 여닫다, 오르내리다, 뛰놀다」のような介在要素無しタイプの動詞結合がそれほど多くないので、このことを考えると、「먹다」をV2とする介在要素無しタイプの例が存在しないことは特に特徴的ではない。しかし、日本語には「食べ歩く、食べ残す、食べ始める、食べ終わる」のような介在要素無しタイプの例が豊富に存在しており⁷⁾、この事実からすると「食べる」をV2とする介在要素無しタイプの例が殆どないということは一つの特徴として挙げることができよう。なお、モデルの方では、ここの説明に該当する部分が日本語では「1(←多)」となっており、韓国語では「無(←少)」となっている。

一般に、V1がV2の「手段」を表す動詞結合の中には、(34)から確認できるように、「押して倒す」のような介在要素有りタイプの「句」と「押し倒す」のような介在要素無しタイプの「複合動詞」が共存するケースが多いが、「食べる」をV2とする動詞結合の場合は、そもそも介在要素無しタイプの例が殆ど存在しないため、(34)のような共存関係は成立しない。

7) ちなみに、野村・石井(1987)の『複合動詞資料集』に収録されている例だけでも7400語を超える。

- (34) 押して倒す⇔押し倒す、削って落とす⇔削り落とす、叩いて割る⇔叩き割る、
殴って殺す⇔殴り殺す、蹴って入れる⇔蹴り入れる、捻って潰す⇔捻り潰す、…
- (35) 焼いて食べる⇔*焼き食べる、齧って食べる⇔*齧り食べる、炒めて食べる⇔*炒め
食べる、茹でて食べる⇔*茹で食べる、噛んで食べる⇔*噛み食べる、…

(34)の共存関係を考慮すると、(35)の「*焼き食べる」「*齧り食べる」「*炒め食べる」などの例は、あっても良さそうなのに実在しないのである⁸⁾。影山(1993:9)は「あられ降り、槍降り」のように、実在はしないものの、もし各々の意味に適合する状況が起これば使用することが可能になるものを「可能な語」と指摘したが、「*焼き食べる」「*齧り食べる」「*炒め食べる」などの例も「可能な語」として理解して良いのだろうか。

4.4.2. 「補助動詞結合」の例の不存在

次に、二つ目の特徴として指摘できるのは、「～食べる／～먹다」の動詞結合の中には「補助動詞結合」の例として分類されるものがないという点である。「補助動詞結合」として認められるためには、一定の条件をクリアする必要があり、その条件とは李(2010a:92～93)で指摘した以下のようなものである(表現の一部を修正)。これは、4.3.4.で示した「補助動詞結合」の判別基準をより綿密な形で言い表したものとと言える。

- (36)a. 形態レベル：介在要素が存在する。
b. 統語レベル：①原則としてV1が文中の格を支配し、V2は文中の格を支配しない。但し、日本語の「～てもらう」などの一部の例は例外とする。
②境界部にV2を修飾する語句を挿入することが困難である。
c. 意味レベル：V1は本来の意味を有するが、V2は本来の意味から後退し、V1に補助的な意味を添える。
d. 本来の意味から後退したV2が十分な生産性を確保する。

「～食べる／～먹다」の動詞結合の中には、上記の条件を全てクリアするものはない。「食べる」をV2とする動詞結合は、全ての例においてV2が本来の意味を保持しており、意味的主要部(semantic head)として機能するため、(36c)の基準に決定的に違反する。また、「먹다」をV2とする動詞結合の場合も同様で、上記の条件を全てクリアするものはないと考えられる。李(2009b:28)に言及した通りに、先行研究の中にはV2として用いられ

8) インターネットで検索してみると、たとえば「風邪気味でニンニクを焼き食べた」のように「焼き食べる」の形が散発的に見られるが、これは「風邪気味でニンニクを焼き、(それを)食べた」とすべきもの、つまり、表記上の誤りであると考えられる。『日本国語大辞典』(第二版)のような大型辞典や膨大な複合動詞のリストを収録している野村・石井(1987)の『複合動詞資料集』などにおいても「*焼き食べる」「*齧り食べる」などの例を見つけることはできない。

る際の意味変化に注目して、「(약속을)잊어먹다」「(시동을)꺼먹다」等の例を「補助動詞結合」として認定するものもあった(박선옥(2005)など)。これらは日本語では「(約束を)忘れてしまう」「(エンジンを)止めてしまう」程度に訳されることから分かるように、意味的主要部がV1の方に有り、このことを踏まえると、「(약속을)잊어먹다」「(시동을)꺼먹다」等の例を「補助動詞結合」と認定しようとするのも理解はできる。しかし、そこには「生産性」に関する問題がある。つまり、「補助動詞結合」として認められるためには、(36d)の「本来の意味から後退したV2が十分な生産性を確保する」という条件も満たす必要があるが、「먹다」をV2とする動詞結合の中にはこの条件までクリアするものは多くない。もし、この(36d)の条件を度外視すると、以下のような例も「補助動詞結合」として分類されるはずであるが、先行研究の中にこれらを「補助動詞結合」と認めたものはない。それぞれのV2が十分な生産性を確保しないという点が決定的な理由であろう⁹⁾。

- (37)a. 나는 요즘 시간이 남아돈다. (『標準』) (남는다/*돈다)
 b. 아이가 빨리 집에 가자고 엄마를 볶아친다. (『標準』) (볶는다/*친다)
 c. 김씨는 이번에도 마누라를 멋지게 속여 넘겼다. (속였다/*넘겼다)¹⁰⁾

従って、(36d)の条件は「補助動詞結合」の認定において考慮すべき重要な項目となり、この条件を設ける以上、「먹다」をV2とする動詞結合の中に「補助動詞結合」と分類される例が出てくる可能性は高くない¹¹⁾。

9) 「먹다」を「補助動詞」として扱っている박선옥(2005: 211)も「보조동사 '먹다' 가 결합할 수 있는 선행 동사의 수효는 그리 많지 않다. '시키다, 부리다, 속이다, 팔다, 잇다, 이용하다, 깨다' 등의 타동사와 결합이 가능하고 자동사와 결합하는 경우는 '생기다', 형용사는 '그르다' 가 있다. 그리고 보조동사 '먹다' 와 공기할 수 있는 주어는 유정체(有情体) 주어(主語)이다. 이러한 구문상의 제약은 아직 보조동사 '먹다' 의 쓰임이 자유롭지 않다는 것을 반영한다. 따라서 완전히 보조동사로 자리 잡은 것이 아니라 보조동사화하고 있는 과정에 있다고 볼 수 있다」と指摘し、V2の生産性の問題に言及している。

10) 강현화(1998: 143)から引用したものである。ちなみに、同氏(1998: 142~143)は、「볶아 치다, 남아 돌다, 속여 넘기다」などの例を挙げた後(分かち書きは原文のまま)、「이 무리의 선행 동사의 결합은 지극히 밀접하나, 후행 동사는 선행 동사의 의미를 강조하는 구실을 할 뿐 선행 성분 의미역 할당 능력이 없으며, 본동사로서의 의미는 찾아보기 어려운 예로 말뚱치상의 빈도가 극히 낮아서 한두 개 정도의 예만이 나타난다. 그러나 이들 구성은 선행 동사만으로 문장이 가능하며 후행 동사는 본동사로서의 의미가 아닌 선행 동작의 강조 구실을 하고 있다는 점에서, 다른「V2가 의존적인 구성」의 동사류와 특징을 같이 한다」と指摘している(表現の一部修正)。

11) ただ、どのくらいあれば、十分な生産性を確保したと言えるかという問題があり、これはその基準を正確な数値で表すことができないという点で難しい問題である。

4.4.3. 介在要素有りタイプの「複合動詞」の有無

最後に、三つ目の特徴として、日本語には介在要素有りタイプの「複合動詞」が見当たらないが、韓国語には介在要素有りタイプの「複合動詞」がかなり見られるという点が挙げられる。当該の「複合動詞」は二種類あって、一つは「句」の意味変化によって作られたと考えられるものであり、もう一つは「句」から派生したとは考えにくいものである。

- (38)a. 田中がパンをちぎって食べた。(←「句」)
 b. *田中が酒代をちぎって食べた。
 (39)a. 다나카가 빵을 떼어 먹었다。(←「句」)
 b. 다나카가 술값을 떼어먹었다。(←「複合動詞」)

(38)と(39)は、李(2009b: 17~18)を引用したものであるが、日本語の「ちぎって食べる」には「意味変化」による「複合動詞」への転換が想定できないのに対して、韓国語の「떼어 먹다」にはそれが可能であることを示している。

- (40)a. *友達に本を捨て値で売って食べた。
 b. 친구에게 책을 할값에 팔아먹었다。(←「複合動詞」)

(40)の場合は、「句」から派生したとは考えにくい一例として、韓国語には「팔아먹다」という介在要素有りタイプの「複合動詞」が存在するが、同じ文脈で日本語は「食べる」をV2とする介在要素有りタイプを許容しないことを示したものである。

(38)~(40)の場合と同様に説明できる例は他にも数多くあり、このことは「~食べる/~먹다」の動詞結合の間に見られる大きな特徴として指摘することができる。モデルの方では、(38)と(39)は介在要素有りタイプの「句」の第V段階と「複合動詞」の第VI段階で説明されるものであり、(40)は介在要素有りタイプの「複合動詞」の第IV段階で説明されるものである。ちなみに、4.2.のモデルで介在要素有りタイプの「複合動詞」の第IV段階の前が「多(←少)」となっているのは、動詞結合全体を見た場合はここに属する例は少ないが、考察範囲を「먹다」をV2とする動詞結合に限定して場合にはその数(=12))が多いということの意味する。

以上、本節では「~食べる/~먹다」の動詞結合に見られる主な特徴を李(2010b)のモデルを活用する形で説明することによって、同モデルが個別例の分析結果を把握する際にも役に立つことを確認した。

5. まとめ

本稿は、李(2010b)で構築した「日韓語の動詞結合形成モデル」が個別例の分析においても活用可能であることを示したものである。具体的には、日本語の「食べる」とそれに対応する韓国語の「먹다」をV2とする動詞結合について考察し、①日韓語ともに介在要素無しタイプとしては具現されない、②日韓語ともに「補助動詞結合」と分類される例が存在しない、③日本語には介在要素有りタイプの「複合動詞」が見当たらないが、韓国語には介在要素有りタイプの「複合動詞」がかなり見られるという特徴を指摘した。そして、この考察結果を李(2010b)のモデルに反映して確認することによって、同モデルが個別例の分析結果を把握する際にも役に立つということを主張した。

本稿では「食べる」と「먹다」をV2とする動詞結合について考察し、そこで得られた考察結果を説明するために、李(2010b)のモデルを実際に活用してみたが、今後、「見る」と「보다」をV2とする動詞結合など、他の個別例についても考察し、李(2010b)のモデルの有効性を引き続き検証していく予定である。

【参考文献】

- 강현화(1998) 『국어의 동사연결 구성에 대한 연구』 한국문화사
- 김계곤(1996) 『현대 국어의 조어법 연구』 박이정
- 김기혁(1995) 『국어 문법 연구—형태·통어론—』 박이정
- 박선옥(2005) 『국어 보조동사의 통사와 의미 연구』 도서출판 역락
- 이관규(2002) 『개정판 학교 문법론』 월인
- 이선영(2006) 『국어 어간복합어 연구』 태학사
- 이호영(1996) 『국어음성학』 태학사
- 李忠奎(2009a) 「日韓語の動詞結合に関する対照研究」 北海道大学大学院文学研究科提出学位論文
- (2009b) 「日韓語の動詞結合の対照研究—「食べる／먹다」をV2とする例を中心に—」 『日本文化學報』 第41輯、17~38、韓国日本文化学会
- (2009c) 「形態レベルからみた日韓語の動詞結合—「連用形」「語基」「語幹」を適用した形態構造分析—」 『日本語文学』 第43輯、89~117、韓国日本語文学会
- (2010a) 「動詞結合 {—어다} 有りタイプについて—日本語との対照も兼ねて—」 『日本語文学』 第46輯、81~107、韓国日本語文学会
- (2010b) 「日韓語の動詞結合の形成過程と分類—「日韓語の動詞結合形成モデル」の構築を通して—」 『日本文化學報』 第47輯、83~100、韓国日本文化学会
- 影山太郎(1993) 『文法と語形成』 ひつじ書房
- 窪菌晴夫(1995) 『語形成と音韻構造』 くろしお出版
- 野村雅昭・石井雅彦(1987) 『複合動詞資料集』 国立国語研究所
- 益岡隆志・田窪行則(1992) 『基礎日本語文法—改訂版—』 くろしお出版

【辞典類】

- 『大辞林』 第二版(1999) (<http://dic.yahoo.co.jp>) 三省堂
- 『日本国語大辞典』 第二版(2001) 小学館
- 『표준국어대사전』 (1999) (<http://stdweb2.korean.go.kr>) Doosan Dong A

要 旨

日本語と韓国語には、動詞と動詞の結合である「動詞結合」が豊富に存在し、それらの本質を把握するためには多様な観点からのアプローチが求められる。

そこで、李(2010b)では、その一環として、両言語の動詞結合がどのように形成され、どのように分類できるか、その形成過程や分類を「日韓語の動詞結合形成モデル」を構築することによって確認した。同モデルは動詞結合の形成過程と分類を操作手順の段階を想定して説明するものであり、両言語の動詞結合の全体像を把握するために構築したものである。

本稿は、李(2010b)のモデルが個別例の分析にも活用可能であることを示したものである。具体的には、日本語の「食べる」とそれに対応する韓国語の「먹다」をV2とする動詞結合について考察し、そこに見られる主な特徴として、①日韓語ともに介在要素無しタイプとしては具現されない、②日韓語ともに「補助動詞結合」と分類される例が存在しない、③日本語には介在要素有りタイプの「複合動詞」が見当たらないが、韓国語には介在要素有りタイプの「複合動詞」がかなり見られることを指摘した後、この考察結果を李(2010b)のモデルに反映して確認することによって、同モデルが個別例の分析結果を把握する際にも役に立つことを主張した。

キーワード：動詞結合、動詞結合形成モデル、複合動詞、句、補助動詞結合

투 고 : 2011. 5. 31
1차 심사 : 2011. 6. 11
2차 심사 : 2011. 6. 25